

「恋愛論」

「恋愛論」とはなんと大げさなまたは口に出すのも憚（はばか）れるような項目だと感じる小中高生そして大人の人たちが多くかも知れません。ここでは、人生では「愛」が最優先するということを伝えたいがために一つの項目を設けました。

親子の愛、友情、そして社会への奉仕の気持ち、男女間の恋愛、今日的には男同士や女同士の恋愛、さらには動物への愛、植物への愛も含めて、人生または「人間であることの誇り」「人間のすばらしさ」は「愛」に尽きると言っても過言でないということを伝えたいがために「館長の社会論サイト」に一つの項目をつくりました。だからこの項は館長からのメッセージの項になります。それもぜひ必要な強いメッセージと館長は意識しています。

ブッダの愛、キリストの愛、ムハンマドの庶民への愛もここに入ります。多くの小説や詩、映画、音楽、ピカソの絵などすべての芸術が何らかの形で「愛」につながっています。ですから私がこんなところで偉そうに文を書くのも憚（はばか）られます。しかし現代の人間はこの「愛」を失っている人が多いし、他方ではわかりきっていることとして「愛の大切さ」を真剣に考えようともしません。小中学生は恥ずかしさも加わって逃げがちなところがあります。大人たちも「危険や恐れを敏感に察知」してとくに男女間の「恋心」を大切にしない傾向にあります。挙句の果ては他人の真剣な愛をちやかしたり、テレビや週刊誌で暴露したり攻撃したりして、男女間の愛を含めた広く「愛」についてまともに尊重しようとはしません。特に日本はその傾向がとて強い国だと思っています。最近フランスの大統領になられたマクロンさんに対するフランスの世論と比較すれば明白です。くれぐれも言うておきますが高校時代の友人の母である自分の先生を恋人としそして結婚した彼と彼女の愛はいわば「略奪愛」なので無条件に拍手喝さいをするべきではありません。ただフランス人は「恋心」を大切にする国民であるということは理解してください。日本人も「恋心」を大切にする国民になってほしいと思って項目を置きました。（今日7月3日にパリ近郊のベルサイユ宮殿でのエマニュエル・マクロンさんの施政方針演説をテレビで見ている。「彼の恋心を貫く強さが政治の側面で良い方向に働けば良いのだが」・・・悪い方向に行かなければいいのに、と不安を感じましたが。私が最も尊敬する一人のジャック・アタリさんが期待しているので私も彼に「世界平和の実現」を「愛し」それを徹底的に追い求めてほしいと思って期待しています。）

再度くれぐれも言うておきますが不倫や浮気や離婚のすすめではありません（笑）。「恋心」を大切に生きてほしいということなのです。生きていく力の源のひとつとしても。

もちろん「愛」の裏側は「憎しみ」であり、「愛がすべてだ」とか「愛こそ生きる理由だ」とかいうつもりはありません。まさしく「愛は盲目=Love is blind」であり、喜びと共に多くの悲劇も生み出します。多くの歴史上の悲劇、現代にいたる世界中の犯罪がどれほど「愛」に起因しているかは多くの人が知っていることです。私が子供たちに歴史の授業中にとときどき話しているように、歴史の学習の時に人間相互の恨みや辛みを愛と共に学ぶと、実は歴史の勉強は何倍も面白くなるのですが（笑）。

このようなことを含めてやはり「人生そして人間には愛が一番大切である」と思いますがいかがでしょうか。ここであるひとつの話をはさみます。

童話作家アンデルセンは「人魚姫」という童話を書いています。東京で法律の勉強をしていた時にどうしてもこの童話のテーマがわからず、中野区の図書館で懸命に「なぜアンデルセンはこのような童話を書いたのだろうか？」と調べました。そうしたら次のようなことがわかりました。60歳以上の年齢になったアンデルセンはふとしたことから知人の商人の子供である若い少女に恋をしてしまうのです。当時でも今でもそのような恋が実現されることはほとんどありません。財産目当てで老人と結婚するという話は今でもどこの国にもありますが（笑）。いろいろな国の支配者である王侯貴族や300人もの彼女を持っていた豊臣秀吉のバカヤローは別にして。ご存知ないかもしれませんがモーツァルトの唯一のオペラである「フィガロの結婚」は恋愛関係における王侯貴族の横暴に怒りを感じて作曲したものなのです。アンデルセンは心の中の老年での純愛に真剣に悩み苦しみます。その実現されることのない強い愛を「人魚姫」という童話に託したのです。今も世界中から多くの観光客がデンマ

ークのコペンハーゲンの浜辺まで「人魚姫の銅像」を見に来るのは、アンデルセンの童話が好きなだけでなく、彼の「片思い」の経験「実らぬ恋の想い」を世界中の人々が人生で経験しそれと照らし合わせているからだと思えます。

同じようにノーベル文学賞を受賞した川端康成についても「年老いた男の恋心が招いた悲劇」の典型であるとも解されているのです。川端が自殺した理由を自分で調べてください。悲しすぎて私には述べることができません。すべての女性を神のようにあがめてきた純情な川端の気持ちを考えれば、何でも本当のことを教える館長もさすがにここでは記述を控えておきます。テレビで見た川端康成の逸話をここに載せます。彼は自分で書いた小説の原稿を取りに来る雑誌の担当者が美人でないと電光を書きませんでした。そして美人の記者が原稿を書くように頼みに来ると、その女性をじーっと隅から隅まで眺めて観察するのです。ここまでだと川端康成も一種の「変態じい」ということになるのですが、しかしそれから数日たって小説の原稿をもらいにその記者が行ってみると、川端の小説にはその女性記者のイメージを基にした小説を書いているのです。当然もらいに行った記者は感動ですよ、だってノーベル文学賞の作家から自分を主役にした小説を書いてもらうのですから。

日本の近代小説の中でも最高傑作のひとつとされている夏目漱石の「心」も男女間の三角関係を描いたもので、読んでいるととっても疲れてしまうところがあります。そのうえ人気連続映画「釣りバカ日誌」のスーさんで有名な三国廉太郎が主演している古いこの「心」の映画を見ていると、心苦しくて気分が悪くなります。

私はアンデルセンや川端康成の「恋心」を大切にしたい人生を送ろうと思っています。高校時代に友人の女子高生たちに「自分は将来恋愛小説家になるのだ」と話したことがあります。今思い出しても恥ずかしさのあまり冷や汗が出てきます。ただ中学から高校にかけて日本の有名な小説家の恋愛小説を読んだことや、高校時代に、ちょうど同じ年頃のアタリやピケティーなどの偉人がそうしたように、自分も同じようにヘッセやバルザックやスタンダールなどの欧米の文学に熱中していたことがこれまでの自分の人生を充実させてくれました。このことは比較的最近気が付いたことなのですが(笑)。

これまで堅苦しく(=まじめに)述べた「法哲学」や「政治哲学」そして「心理学」や「社会学」に関する諸問題、そして「文学論」も結局はすべてこの「恋愛論」と大きくかかわっています。

この後「映画論」や「音楽論」を続けますが、すべてこの項の「恋愛論」の続きの話として位置づけてもよいのではないかと思います。

参考までに、ごく最近の志成館館長の「幸せになるための思考方法」を2つ載せます

幸せになるための思考方法

NO. 29

< 「愛」とは何だろう >

・・・「愛情」その①「愛」とは

「愛」と言うと君たちの多くが「男女関係の事」だと考えると思う。しかしこれは正確には「恋」という文字が適切だと思う。英語の単語では「愛」は love か affection で、気持ちの強さで分けているようだが、日本語では「愛」と「恋」を使い分けた方がわかりやすいように私は思っている。神学で言う「アガペー」と「エロス」という区別の方がわかりやすいと考えているのである。そこで今日は広く「愛」についての話をしたいと思う。

「愛」とは人間にとって最も大切な感情であり、必然的に「自己犠牲」を伴う。だから「愛＝自己犠牲」というような心理学的な把握をしてもよいのではないかと私は考えている。「親子の愛」「友情」「動物や自然への愛」「奉仕の心」などは、自分が損することを平気で受け入れる気持ちがない限り実現不可能である。これは人間特有の感情で、人間の誇りであり、それがなくては生きる価値もないほど人間にとって大切な感情であると言えよう。

確かに動物も自分の子供以外を可愛がり異なった動物をかわいがって育てるが、その多くは「自分の子という勘違い」かまたは「種族を守るため」という衝動によるものであって、人間の持つ愛情とは異なると科学的には解されている。だから全くの他人や他者、たとえば犬や猫などのペットや鯨やイルカや小鳥そして花や植物にまで真の愛情を注げるのは人間しかないと言えるだろう。

その人間は「家族」や「友人や隣人などの他者」から受けた愛情に比例して「愛情あふれる人間」に育っていく。正確には「そうなるはずだ」と言えるだろう。というのはそれが「愛」だと感じる気持ちを持たないで育った人間や、「愛」だと教えてくれ

る人がいない環境で育った人もいるし、そもそもそのような「愛」に恵まれることもなかった人間もいつの時代にもいるからである。

君たちは人間にとって最も大切なものが「愛」であることをしっかりと理解してほしい。自分を犠牲にしても他者や動物や植物を守ろうとする気持ほど尊いものはないと認識してほしい。釈迦もキリストもムハンマドも同じことを言っているに過ぎない。科学も人々の幸せを願って進歩したはずである。

そうすれば世界中から醜い争いがなくなる日は必ずやってくる。

2017年 初夏 志成館

幸せになるための思考方法

NO. 30

< 「愛」とは何だろう >

・・・「愛情」その②「恋」とは

「愛」という感情が人間にとって最も大切な感情であることは前に述べた。次にここでは「恋」という君たちの多くが興味を持っているであろう(笑)「男女関係の事」について話したいと思う。

館長も多くの人と同じく「恋」の達人ではないし、これまでもいろいろなことで悩んできた。あまりいい思い出はないと言ってもいいのかもしれない。しかし中学時代から多くの小説を読み、たくさんの映画を見、多くの曲で恋の歌を聞き歌ってきた。そこでこれらをまとめて簡条書きをしようと思う。参考になることを願って。

- ①多くの小説や映画や楽曲が「恋」について語っている。百人一首も40首以上が恋の歌であることは知っていると思う。だから確実に言えることは「恋」は君たちの人生を豊かにし苦しめ生命をも左右する「一大事」であると考え、すべてにわたって真剣に考えて、いい加減に軽く扱わない決意が必要であるということ。
- ②他方で「人生は喜劇そのものである」と言われるように、恋によって人生をこわれることも多い。そこで、強い気持ちで、面白くおかしく対応する失恋した時などへの心の準備も必要であると考えよう。
- ③恋がなかったら文学も音楽も科学もへったくれ？もないということで、「恋」に対する寛容な気持ちが必要だという発想をしよう。そして「小説や歌や映画で自分の恋心を楽しむ」ことも一つの方法だと考えよう。
- ④「恋」することによって決して他人を不幸せにしないという心構えも必要かもしれない。
- ⑤「蓼食う虫も好き好き」と言われるように人の好みは説明がつかないのだから、他者が自分を好きになってくれないからと言って、その人を恨んだり、嫌がらせをすることは人として許されるものではない。
- ⑥人は「いつ」「どこで」「誰を」好きになるかの「予測」はつかないし、そのことの「説明」ができるはずもない。だから「恋」とは危険極まりない物であり、だからこそ小説や映画や歌のもととなる。恋の争いに巻き込まれたら「だから人生は面白い」と開き直ったうえで、絶対に他者を傷つけることなく自分で責任を取ること。・・・etc.(エトセトラ:その他いろいろ)

2017年 初夏 志成館

以上のように「恋愛論」は「文学論」や「映画論」や「音楽論」と重複する。そこでこの項の最後に最近の映画雑誌「スクリーン」の2017年6月号を紹介する。この本の中のいくつかのページをここに張り付けたいが「著作権違反」になるのでやめにする。ぜひ購入してほしい。なかったら「バックナンバー」として書店で手配して取り寄せてくれる。小説・フィクション・アニメ等を含めて素晴らしい映画が列挙されている。しかもいろいろな項目に分けて。受験生は「大学生になってから」長い人生で、これらの恋愛映画や小説を自分の人生に照らし合わせながら楽しんでください。恋の仕方の「ノウハウ」映画になりますよ、特に気が弱い人には(笑)。



時間と許可があれば、左の雑誌のなかに記載されている「恋愛映画のランキング」の表をコピーして載せます。

悲しきかな「#me too」という運動の行方

「# me too」という運動が世界中で展開されています。女性への性犯罪や性的な嫌がらせを受けた人たちが連帯して、女性を守っていこうという運動です。その考えや行動に出る勇気は、高く評価すべきであり、これまでの男性中心の社会が、どんなにか女性に対して、苦痛を与え続けてきたかを世界中に知らせる効果があり、とても立派な行動だという面では賞賛に値すると思います。今でも私の周りにも女性に対して相変わらずの感覚しかもっていない男のひとがたくさんいますから。そして企業での実態は、この手のセクシャルハラスメントはパワーハラスメントと一体でなされており、その意味でも、ひろく弱い立場にある女性にとっては好ましい運動であると評価してよいと思います。

しかし最近のこの運動の広がりを見ていると、明らかに行き過ぎの部分があり、これでは文化や人間の機微に触れる、人生の楽しさも失われてしまうのではないかと私はとても危惧（きぐ=心配）しています。この運動をしている人たちの主張の最終目的は、「自分が許せる範囲の人たちからの告白やデートの誘いや口説きはセクハラにはならないが、自分が不快に感じる人たちからの告白やデートの誘いや口説きはセクハラになる」と言うところまで行きついているように私には見えるからです。しかも、それを今日の話としてではなく、過去のすべての行為に遡及させるという、刑法の手続き（=デュー・プロセス・オヴ・ロウ=日本では罪刑法定主義とほぼ同じ）にも反する、強引なやり方で、これまで映画や音楽の発展に貢献してきた著名人を社会から抹殺するような、ひどい動きにしか見えなくなっているからなのです。

この状況では、映画界や音楽界、ひろく文化の世界から、私の言葉を使うと「色っぽさ」「何かわからないような後ろめたさや優越感」「いかがわしさ」という、確かに問題があるものの、生身の人間が、理屈通りには進まない社会や人生を送ることの、「危険な香り」を感じながら生きていくような、ある種の面白みのある人生がなくなってしまって、まさにコンピューターやロボットみたいな、暖かさも優しさも、思いやりも寛容さもない「冷徹な計算されつくしたつまらない社会そして人生」になってしまうことは明らかではないでしょうか。

誰かこの#METOOの異常さを告発してくれないかなと、じっと我慢して待っていたのですが、とうとう私が待望していた人物が登場しました。フランスの大女優カトリーヌ・ドヌーブさんを中心とする100人余りの女性からの主張です。「さすが自由の国フランス」だと、とても喜んでいます。当然ながら彼女の主張への反論は続くでしょう。しかし、もし「人間とは一体何なのか」「人生の機微とは一体何なのか」「人生のこっけいさや面白さはどんなところにあるのか」などを本気で考えられるなら、彼女の主張にも、耳を傾けてください。

彼女はフランスの新聞紙ル・モンドに投稿したのですが、日本では「朝日新聞」に掲載され、私は状況を把握したうえで、このホームページにアップしました。彼女たちが言う通り、このような動きこそが「ファシズム=全体主義（個人を尊重しないで、社会全体を一定の方向へ強引に進めようとする危険な思想）」の動きであり、社会崩壊の流れであるという点で、全面的に彼女を支持したいと思っています。この志成館のホームページもファシズムから人々を守るためのものですから。



米映画界の関係者がハリウッドで長年黙認されてきた性的加害行動を強く糾弾するなか、フランスでは女優カトリーヌ・ドヌーブ氏ら 100 人の著名女性が 9 日、男性が女性を誘うのは犯罪ではないと公開書簡で主張した。（右端は、彼女たちを支持する声明を出したブリジッド・バルドーさん）


9 日付の仏紙ル・モンドに掲載された公開書簡でドヌーブ氏たちは、昨年から次々と表面化する性的スキャンダルによって、新たな「ピューリタニズム（清教徒的な過剰な潔癖主義）」の波が起きていると警告した。

作家や学識者、表現芸術の関係者など著名なフランス人女性 100 人は、「ただ誰かの膝を触っただけ、あるいは誰かをキスしようとしただけで、多くの男性が問答無用に罰せられ、職を追われてきた」と批判している。

「強姦は犯罪だが、誰かを口説こうとするのは（たとえそれがしつこくても、あるいは不器用でも）犯罪ではない。そして、男性が紳士的にふるまうのは、決して男尊女卑な攻撃ではない」と、女性たちは書簡で主張している。

書簡に署名した女性たちは、昨年秋に米映画界の大物プロデューサー、ハービー・ワインスティーン氏が何十人もの女性を強姦、あるいは性的に暴行したと糾弾されたことを機に、「非難」の波が次々と押し寄せていると指摘。今や世界で新たな「ピューリタニズム」が進行していると主張している。

ワインスティーン氏は、合意のない性交渉については一切の疑惑を否定している。しかし、自分の振る舞いが「多くの痛みをもたらした」ことは認めている。

Image copyright  Image caption ハービー・ワインスティーン氏は、アカデミー賞を主催する米映画芸術科学アカデミーから除名された

書簡の女性たちは、一部の男性による権力の乱用を指摘するのは正当で必要なことだが、ひっきりなしに続く糾弾の波は、收拾がつかなくなっていると指摘。このせいで、まるで女性が無力で、慢性的な被害者であるかのような雰囲気、女性をそのように見る風潮が生まれていると書いている。

「私たちは、今のこのフェミニズムの動きに、女性としての自分を見いだせない。権力乱用を非難する以上に、男性や性的なものを憎悪する動きになってしまっているので」と、書簡の女性たちは、ハリウッドを中心とした動きに距離を置いた。

ドヌーブ氏はこの書簡以前にも、誰それが性的な加害行動を女性にとつたと男性を糾弾するソーシャルメディアでの運動について、当事者の男性を辱めるのが目的になっていると否定的な発言をしていた。

性的な加害行動を経験した世界中の女性と男性が、ソーシャルメディアで自分たちの経験をハッシュタグ「#Me too（私も）」を使って共有している。

フランスでは、ハッシュタグ「#Balancetonporc（いやらしい男を言いつけよう）」を使い、加害者の実名を挙げて恥をかかせようという動きが起きている。

女優のドヌーブ氏は 1957 年にデビューした後、100 作品以上の映画に出演。アカデミー賞主演女優賞候補にもなっている。

[下] カトリーヌ・ドヌーブさんの写真。欧米でも日本でも昔の女優さんの美しさは桁違いと思いませんか？

志成館の館長からの「恋愛論」に関するメッセージ

「男女関係を」否定的にとってははいけません。また悪い意味での「儒教感」から、恋愛を「本質的に不自由な、社会的な拘束を必然的に伴うものである」と理解するのも、現代人としては妥当とは言えません。まして「カトリック保守派的な倫理観で」、ひろく恋愛や出産を巡る諸問題を、硬直的に理解するべきではありません。「性」を否定的にとらえることは「ルネサンス」や「科学や学問への信頼」という、「人間讃歌(人をたたえる行動)」の「輝かしい人類の勝利」さえも否定することになるからです。

小中学生や高校生や大学生にとっては「きわめて重大な問題」であり、避けて通ることもできません。「恋」に悩み「愛」に悩み、「友情」に日々悩み続けるべきです。「勉強の方が大切に決まっている」という意見が間違っているとは思いませんが、私自身は「そのような大馬鹿者」にはなるべきではないと、自分の人生を反省しつつ、考えています。学習塾のホームページの項目の中に「恋愛論」を含めているのは、「恋」や「愛」をめぐる問題がそれほどまでに重大であるという認識の前提があるとともに、みんなで、明るくそして前向きに「恋」や「愛」を議論してほしいからです。決して、多くの男(や女)たちがやっているように(ちなみに私はそんなことにかかわったことはありませんが(笑))、陰でこっそりとなおかつ卑猥に議論するようなものではありません。館長の時代はもちろんの事、世界中での各地域や各宗教その他で、「恋愛の自由」などはまだ広く認められているとは言えません。そんな社会で戦い抜いて、真の「愛」を貫いてください。「小説」になるような愛を。もちろん「もしそのような素晴らしい人に出会ったら」の事です。

ですから志成館では積極的に「素敵な出会いがあるような場所に足を運びなさい」という指導をしています。たとえば男子高校や女子高校であるなら、男女が一緒に学べる同世代が集まる学校の外の「英会話学校」や「韓国語学校」や「フランス語学校」などに通うのです。多種多様の、危険性がない所で(笑)。研究会や学習会や趣味の会がありますよ。今の時代はとんでもないバカヤローがいて、危険性も多いので、注意はしてくださいね。たとえ「恋はいつでも危険である」としても。

話は変わりますが、資本主義社会は「恋愛」に経済的な部分(=金銭的な関係)がかかわってきます。つまり、現代の恋愛は、デートの時のお洒落にも、デートの内容や食事にも金銭が関わり、「ブルジョワ的な恋愛」という「恋への理論づけ」が出来ます。えっと驚かれる方が多いとは思いますが、真剣に考えれば、誰にでもわかることなのです。そうであるがゆえに、現代という時代では、金銭にかかわらない、真の「恋」にはなかなか出会わないという考えです。その意味では現代も、昔と同じように、小学生から中学生や高校生の頃の恋が「純愛」であるのかもしれない。

他方で、富=金銭にいつさいかかわらない「恋」の存在という議論も成り立ちます。それはカール・マルクスの言う「恋愛論」で、富とは一切を隔絶された=無関係な恋愛というものです。私が学生時代は、そんなことも議論していました。マルクスの言う「疎外論」などと共に、ごく普通に、学生同士で議論していました。現代の恋愛の多くが「ブルジョワ的な恋愛」であるがゆえに、「#me too」のような議論が起こるのです。もっと「何の束縛もない自由な恋愛」をしてくださいね。大げがをしても私は責任は取りませんよ。

話のついでになりますが、私が「世界最高の女性であり妻である」と尊敬するのが、「ウェストファーレンの花」と呼ばれた、イエニー・フォン・ヴェストファーレンその人です。言うまでもなくカール・マルクスの奥さんです。このたくましくも優しい女性の名前を忘れないでください。

い。私はこれまでにこの評価を変えたことは一度もありません。それほど私が頑固な石頭だからかもしれませんが。尚、私の奥さんもイエニーに負けてはいません(笑)。

(参考文献) 宮本百合子全集第15巻 「カール・マルクスとその夫人」 (新日本出版社) 「ヴェストファーレンの花」 (岩波新書)

2018年1月22日(月)

世界最高の文学者と私が尊敬する、トーマス・マンの小説からの「失恋」の表現

・・・私が最もお気に入りの文章です

曰く「私は、ある女性を自分の生涯の伴侶として、一生その人の面倒を見ようと考えていた。しかしその役割は、別の人が果たすようになってしまった」というものです。

正確には、私が暗記している「そのような内容の文章」でした。ですから正確な文章を確認したい方は、彼の作品を読めばすぐにわかることです。自分で探して、彼の偉大さを知ってください(笑)。

私の悲惨な「片思い」

私には「片思い」の経験があります。と言うよりも今もまだ片思いをしています。どんな女性に片思いをしているのかと言うと、「中学の入学式の時に会った、別の小学校から同じ中学に進学してきた女の子」です。瞳が大きく、とても落ち着いた、上品で育ちがよく、私からすれば最高の美女でした。実は、こののち中学1年生の途中で他校から私の中学に転校してきた女性がいて、その同級生が紛れもなく「絶世の美女」で、笑顔が可愛く、スタイルもよく、「才色兼備」であり、あまりにも際立っているために、私の視野には、現実に存する女性としては入ってきませんでした(笑)。その後、今日までの人生でも、この女性以上の女性に出会ったことはありません。こんなことを言うに「よほどひどい女性としか出会っていない人生なのだ」と笑われるかもしれませんが。人並みに「命を捧げてもよい」と思った女性には出会っていると思います(笑)。今の私にとっての世界最高の美女はニコール・キッドマンであり、もう一人のスーパー美女がテニスのマリア・シャラポワなのですが、中学の1年生の時に転校してきたこの美女は、マリア・シャラポワに似ていて、彼女に勝るとも劣らないほどの美女でした。名前も姿かたちもその後忘れたことはないのですが、プライバシーの侵害になりますのでこれ以上は述べられません。ついでながら、その後の人生で会った、驚くような美女こそ、今の妻になります(笑)。出会った当初には、まさか私の妻になってくれるとは思っても見ませんでした。外見以上に「性格」が美人なのです。「おのろけ」になるので話を戻します。

私の片思いのこの女の子は、当時テレビで「SHは恋のイニシャル」という、確かジュディー・オングが演じていた連続テレビと同じイニシャルで、中学1年生の時から60歳を過ぎたこの年まで、一貫して？片思いの対象でした。勇気も行動力もない私は、いつも遠くからこの女性を見つめていました。特に中学生から高校を卒業した後少しのあいだはそうでした。その後も、

この「現実には存在しない女性」に関するいくつかの日記も書いています。今でいえば「ストーリーカー」以外の何でもない、変態人間であると批判されるでしょうが、いかがわしい内容など一切なく、まさしくヘルマン・ヘッセやバルザックの小説の中の女性と同じであり、川端康成の純愛の世界の女性であったと言えるでしょう。実は高校入学試験に合格した後、一度だけ「ラブレターもどき」の手紙を書いたのですが、なにを勘違いしたのか、住所を間違えて戻ってきたのです。その後臆病な私が、二度と再び行動に出たことはありません。それでも高校生になっても、わざと電車の時間を合わせて通い、そして帰りもわざと博多駅まで行って、同じ電車に乗るように努めました。遠くの車両から眺めるだけで、「何かの偶然が二人を地被けてくれないかな」と願うだけの、受験学習に没頭する日々でした。

中学1年生から大学生まで、一日たりとも彼女のことを思い出さない日々はありませんでした。高校時代にも「もし九大に合格出来たら、その時は必ず・・・」などと考えていましたが、「浪人」になってしまった時点ですべての希望が潰えたように思えました。そういえば大学生を卒業した後、おそらくこの女性がすでに結婚をしている頃、年賀状を出したことが一度だけあります。それが私にできた唯一の「告白」なのであると今でも考えています。

その後も20年、30年、40年さらに50年以上たっても、私の「夢」の中に彼女は出てくるのです。いつもうなされて目が覚めます。その時の彼女はいつも中学生か高校生の時の「セーラー服」を着ていて、いつものように優しい瞳をしているのですが、私の方を見てくれることもなく、話しかけてくれることもなく、ただ私が一生懸命に、目で追いかけてようとしているだけの夢なのです。精神分析が必要なのでしょうか、私自身は「農業の後を継ぐように強いられ」「自分の能力や正直な気持ちとは程遠い、自分の思うようにいかなかった、強引な性格の自分の人生の在り方」に対する「もう一つの選択肢の一例」として夢に出るのだと分析しています。

しかし確実に言えることは、上記トーマス・マンの言葉を借りると、「私が彼女を幸せにすることはできなかったであろう」ということは確実であり、その意味では、彼女にとってはもちろんの事、私にとっても、客観的には「あこがれの女性」であり続けたことは、幸いなことであるといつも受け入れています。

それでもこのような文書を書く「真意」はどこにあると思いますか。それは、この歳になって、したいことや出来ることはすべてにおいてしてきた私が、まだ実行していない、たった一つのことが、「この憧れの女性に、自分の中学生時代からの想いを伝えること」だからなのです。「何とも言えない哀れで悲惨な片想い」のストーリー（これは私の実話です）に付き合ってくれてありがとうございます(笑)。小説家になりたかった私が書いた、たった一つの、悲しい「小説」になります。

2018年1月24日(水)

・・・私の塾の教え子諸君は、私がなぜ授業中に「失恋しても、立ち直れる強い気持ちがあるなら、正直に告白していた方が、将来に悔やむことはなくなるよ」といっている理由がわかってくれたかと思います。もっとも私自身は、アンデルセンの「人魚姫」のような「片想いの世界」を「つまらない人生である」などとは思っていません。自分に勇気がなくて告白できなかったことを、悪いことだとは思っていません。人生はそんなものなのですから。私の年齢になっても、このような話ができるなんて素敵なことだと思いませんか？もしこののちの人生でも「こくる？」チャンスや勇気がなかったら、デンマークのコペンハーゲンまで出かけて、浜辺の人魚姫に代わりに告白してきます、世界中の多くの先生みたいな年齢の人たちがそうしているように。